2．4歳児事例

徳田いずみ　　髙本　洋

事例１　「やったあ、止まった」　10月24日（月）

A児、B児らが、園庭をシャベルで掘り、水路をつくっていた。C児とD児が樋を利用して水道から水を引いていた。しばらくすると、B児が掘り進めている方へどんどん水が流れ込んできて、水路から水があふれ出した。

教師　「B児ちゃん、大変！あふれたよ」
B児　「わあ、どうしよう・・・」

B児は困ったような顔をした。そこで、教師は水路に沿って、堤防をつくり始めた。その姿を見て、B児も一緒に堤防づくりを始めた。しかし、園庭の土ではすぐに崩れてしまう。

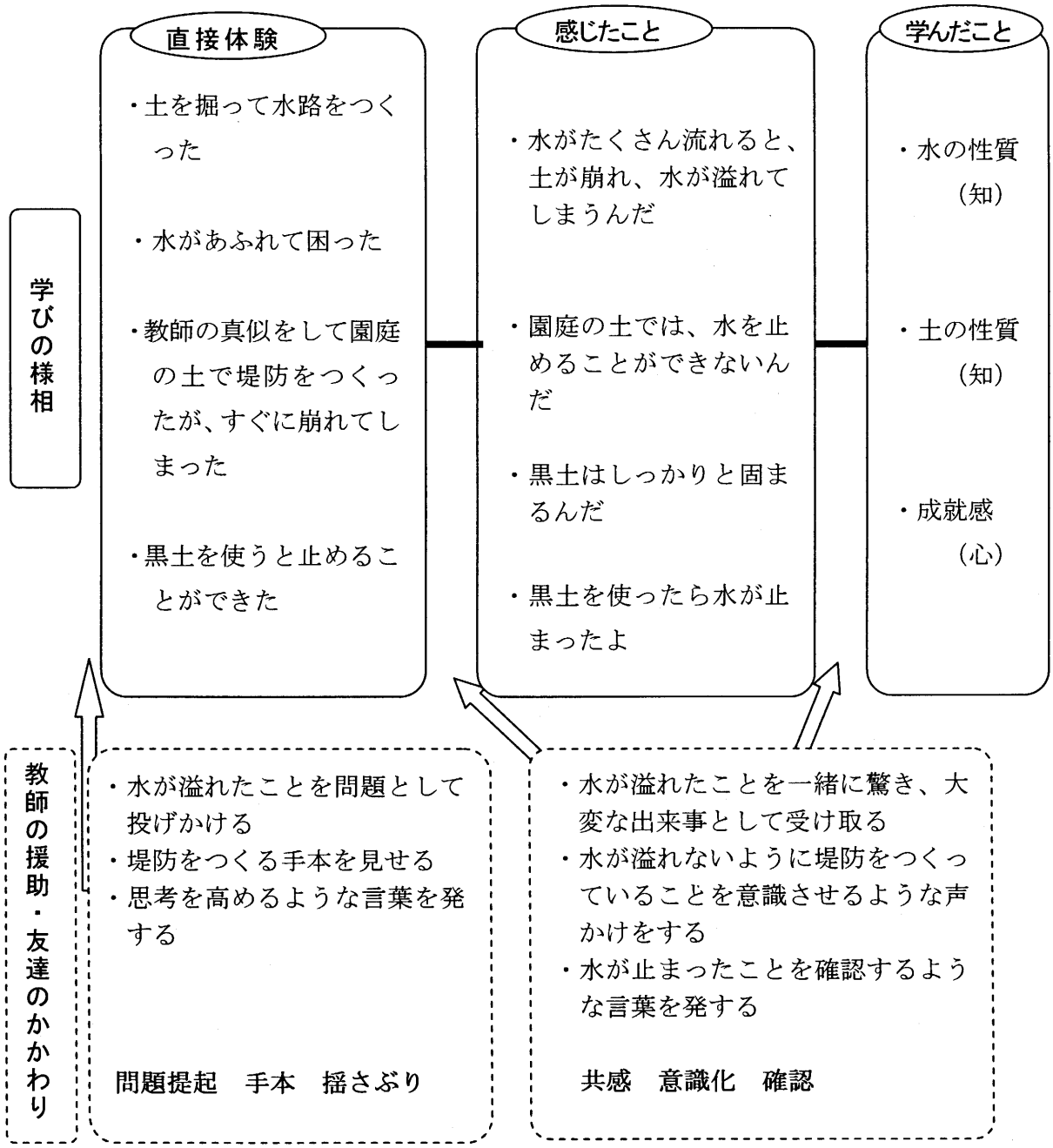
教師　「もっと固い土ないかなあ」
A児　「そうだ、あの土だ」

そう言うと、A児は藤棚前にある黒土を取りに行き、もってきた。そして、その黒土で崩れた堤防を修復していくと、しっかりとかたまり、水もあふれてこなくなった。

B児　「やったあ、止まった」
教師　「止まったね。あっ、こっちも崩れそう」
B児　「わたしその土とって来る。どこにあるの？」
A児　「こっちだよ」

A児に案内され、B児は黒土を取りに行った。両手いっぱいに黒土をもってきて、堤防をつなげ始めた。

＜「学び」の様相と教師の援助＞



＜今後に向けて＞

・学びを高めるときに、「黒土」という言葉とつなげるような援助があってもよかったのではないか。「黒土」という名称を知ることが、言語の獲得につながる。

事例２　「ここに足くっついたら、できるげんよ」　　10月28日（金）

したい遊びの時間、忍者ごっこをしているＥ児、Ｆ児、Ｇ児、Ｈ児らがＴ教師に頼んでテラスの天井に吊してもらったロープを使って遊んでいた。Ｆ児はロープに足をかけ、空中をぶらんこのように揺れている。肋木に向かってロープで飛び移ろうとしたが、失敗した。

Ｆ児　「一回戦、ぼくがしてんけど、ここ登って上まで行けたもん」
教師　「すごいね。二回戦は、どうかな」

しかし、次はＧ児の番である。Ｇ児はロープに手をかけたが、下へ飛び降りた。そして、次にＦ児が挑戦した。それをＨ児、Ｅ児らが見上げている。Ｆ児はロープにぶら下がり、向かい側の肋木へうまく足を引っかけ、飛び移った。

教師　「すごい！　Ｆ児忍者、飛び移れた！」

次はまたＧ児の番になった。後ろにはＥ児が順番をついている。

教師　「Ｇ児忍者、がんばれ！　Ｈ児忍者はロープを渡す係ですか？　Ｆ児忍者のようにあっち行けるかな？」

Ｈ児が持っていたロープをＧ児に渡した。Ｇ児はロープを手にしたが、床を指さし、

Ｇ児　「ぼく、おりる。この下に」

と言って、下に飛び降りた。続いて肋木にぶら下がっていたＨ児も飛び降りた。次にＥ児がロープで飛び移った。足をうまく曲げて、

教師　「あ、飛び移りました。Ｅ児忍者、成功です！」
教師　「この下はもしかして川なの？」
Ｅ児　「うん。そうだよ」

Ｆ児の番になった。

教師　「さぁ、川を越えられるでしょうか。川越え作戦！」

Ｆ児がうまく飛び移った。

教師　「川越え作戦、成功です！」
F児　「ここに足くっついたら、できるげんよ」

F児は肋木に足を絡めるとうまく飛び移れることを説明した。続いてG児の番である。

教師　「G児忍者、がんばれー！ もうちょっとだ」

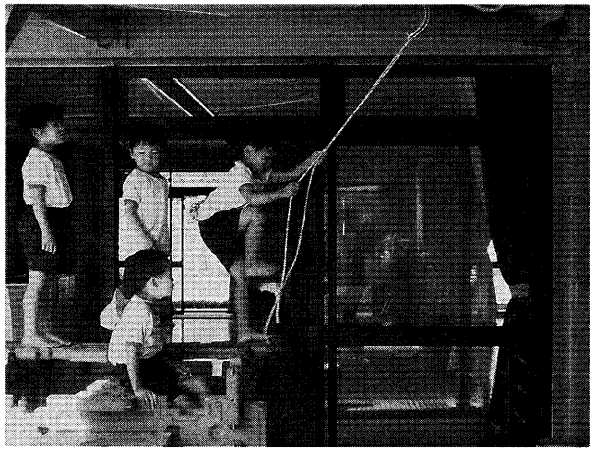
G児は失敗したが、また順番についた。その後、E児やF児が飛び移ろうとし失敗したり、G児も飛び降りるのではなく、F児のように肋木へ飛び移ろうと挑戦したりしている。
G児は足先で肋木を捉えようと一生懸命伸ばしているが、ロープが揺れるため、思うようにいかない。ぶらぶら空中を揺れていたところ、E児が、

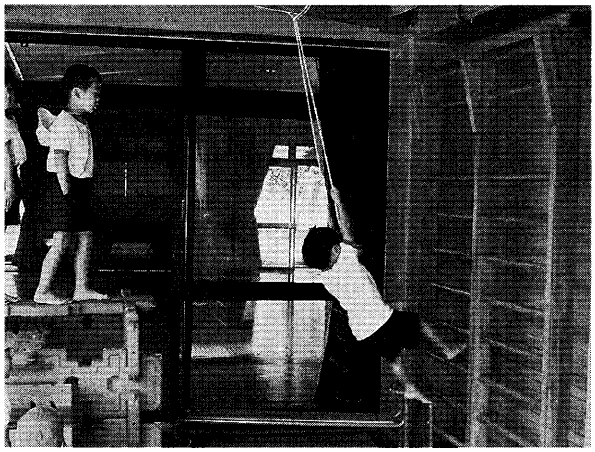
E児　「今、あそこの下にワニおるよ」
教師　「ワニいたら、足、食べられちゃうね」

G児はその言葉を聞いて、思わず足を引っ込めた。そして、うまく平均台の上に着地したため床のマットまでは落ちなかった。続いてF児、H児らもまた挑戦したが、肋木にはたどり着けない。H児はG児のように平均台に着地した。またまたG児の番である。

E児　「さあ、次はどうなるでしょう」

とE児がその場の状況を教師のように言った。G児はうまくいかなかったものの他の忍者達と一緒に何度も繰り返し飛び移ることに挑戦していた。





＜「学び」の様相と教師の援助＞

学びの様相

直接体験

・ロープにぶら下がった

・勢いよくロープで肋木に飛び移った

・繰り返し飛び移った

感じたこと

・ロープにぶら下がるのは難しいな
・失敗して痛い目に遭った（G児）
・ G児くらいはできた（H児）
・平均台に着地できてうれしいな（H児）
・ 真似をしてやってみたら、いつの間にか仲間になることができた（H児）
・足をタイミングよく肋木に引っかけたら乗り移ることができた（F児）
・いつもうまくいくとは限らないな（F児）
・先生がワニの話に乗ってくれてうれしかった（E児）
・ 友達と一緒にすると楽しい（E児）

学んだこと

・失敗感（心）
・ 痛み（身体）

・成功感（心）
・一体感（社）
・飛び移る時の身体の使い方（身体）
・ ぶら下がる感覚（身体）
・ 足をひっかけるタイミング（身体）

教師の援助・友達のかかわり

・ 幼児らの遊びを見守る
・ 励ます
・ 幼児らのアイディアや場を支える（言葉かけ）

環境設定、見守り

・幼児らの行動、言動など様子を見守る
・場のイメージを引き出す
・コツを広める
・仲間に入れるように役割を位置づける
・雰囲気を盛り立てる声かけをする

励まし、イメージの言語化、問いかけ、揺さぶり、評価、意欲付け

＜今後に向けて＞

・H児のような邪魔まじりの姿も認めながら、やりたい意欲が満足するように援助したり、さりげなく遊びの場に参入するための方法を体得していけるよう見守ったりする。

事例３　「セーブします」　11月１日（火）

園庭でＩ児、Ｊ児が遊んでいた。何をしているのか聞いたところ「探検にでる」と言ったので、一緒にいたＫ児とついていくことにした。最初に小学校理科室前を探検することになった。

教師　「何が出てくるかね」
Ｋ児　「何かね」
Ｉ児　「宝が出てくれんよ」
Ｋ児　「えっ、宝が出てくるの？」
Ｉ児　「こっから宝が落ちてくれんよ」

宝は空から落ちてくるという設定であった。そこでＩ児がするようにみんな手を出し、落ちてくる（目には見えない）宝をとる真似をした。

Ｉ児　「今、宝、手に入ったよ」
教師　「あーよかった。宝見つかって」
Ｋ児　「よかったね」
教師　「隊長だれや？」
Ｊ児　「Ｉ児が社長。Ｉ児社長で俺ガチョウ」
教師　「そうなんや。Ｉ児社長！ 次はどこに宝があるんですか？」
Ｉ児　「こっちですよ」

Ｉ児はみんなの先頭に立って小学校の砂場へ行った。その途中でＬ児がやってきた。

Ｌ児　「先生、何しとるん？」
教師　「宝探しの探検」
Ｌ児　「じゃー先生はお母さんね。ぼくは５年生ってことね」
教師　「うん」

Ｌ児も混ざり、みんなが小学校の砂場に到着した。Ｉ児は石段の上にあがり、みんなに指示を出した。

Ｉ児　「ここまわらんといかんげんよ」
教師　「そうなんや」

全員が石段の上にあがり、まわりはじめた。すると

L児　「あっ、見つけた！」

と犬のように砂を掘りだした。

I児　「それ青色やよ。銀色見つけんなんげんよ」

再びみんなで石段の上を回り、銀の宝を探すことになった。しばらくすると、ようやく宝が見つかった。

J児　「社長、I児社長あったぞ」
I児　「おっ、あったぞ」

I児、L児が砂を掘り、宝を手に入れた。そしてI児の手にある（目には見えない）宝をみんなで眺めた。

教師　「お宝ゲットやね、やったね」
K児　「お宝見つかってよかったね」
I児　「おたから、おたから」
みんな「おたから、おたから」

と、互いに両手を挙げて小躍りし、喜び合った。

I児　「よし、じゃぁ次は金色のお宝をゲットするぞ」
J児　「I児、(ブランコを乗り物に見立てて）ブランコバンバンで行くぞ」
L児　「(ユニオンサークルを乗り物に見立てて）ロケットで行こう!!」
I児　「・・・・・(少し考える)」
J児　「I児社長!!」
I児　「ロケットで行く！」

ロケットで行くことが決まり、みんなでユニオンサークルの上にのぼった。そして教師の周りにみんながしがみついた。

I児　「発車!!」
みんな「ビューン」

Ｉ児　「到着です。秘密の扉あって、そこから宝を探します」
Ｋ児　「どこに扉があるの？」
Ｉ児　「こっちですよ」

ユニオンサークルから降り、園庭のいろいろなルートを通って小学校理科室前の山にのぼり扉を発見した。

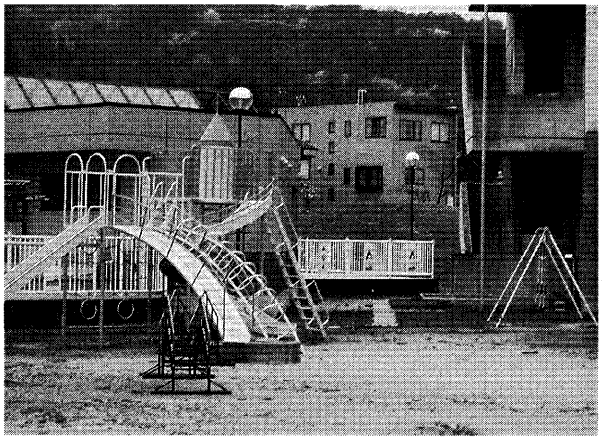
ガチャガチャガチャと鍵をあける真似をし、扉を開けるが、本物の扉ではないという設定だった。そこで本物の扉を探すことを何度か行っている時に『かたづけ』の声が聞こえてきた。けれど、探検ごっこをやめる様子はなかった。

教師　「おかたづけになってしまったしまた明日やろ」

Ｉ児は少し考えた様子だった。

Ｉ児　「今からセーブします」「明日はさっきの扉からね」
教師　「うん。明日楽しみやね」
Ｌ児　「明日またやろ」

みんな部屋へと戻っていった。



＜「学び」の様相と教師の援助＞

学びの様相

直接体験

・たんけんごっこでたから探しをした
・役割を分担して遊んだ
・友達や教師が自分のイメージで一緒に宝を探した
・探検ごっこの続きをする方法を考えた

感じたこと

・先生や友達と探検ごっこをして楽しかったな
・先生も友達も僕についてきてくれてうれしいな
・探検ごっこをやめても明日また続きができるな

学んだこと

・友達と一緒に遊ぶ一体感（心）
・教師や友達とイメージを共有する楽しさ（心）
・満足感（心）
・遊びからかたづけへの切り替え（社）
・期待感（心）

教師の援助・友達のかかわり

・何を探検するのかを尋ねる
・探検隊の中での役割を尋ねる
・I児と同じイメージがもてるように真似をする
・最終的な判断をI児に任せる
・I児のイメージの世界に参加する

参加　イメージの共有　尊重

・一緒に宝探しをする
・探検することを楽しむ
・I児のイメージについていく
・宝が見つかったことを一緒に喜ぶ
・遊びの方向性（決断）をI児に委ねる（J児）
・最後まで一緒に遊ぶ
・教師も続き（明日）を楽しみにする
・見通しや期待が持てるような言葉がけをする

参加　共感　方向づけ

＜今後に向けて＞

・イメージを広げたり深めたりできるよう、I児の遊びの場やイメージを共有しながら、今後も共に楽しみたい。
・I児の友達関係の深まりを見守りつつ援助していきたい。

事例４　「よしっ！」　　11月４日（金）

前週から続いている水路遊びの場で、A児、C児、年長児ｚ児、ｙ児らが、水路遊びを楽しんでいた。自分たちの掘っている水路に水が流れるよう、水の流れを工夫しながら遊んでいた。この日は大きく２つの水路が延びていて、それぞれの水路に水を引こうと、樋の連結部分に２つの樋が並んでいた。

そのうちA児が水道の水を止め、連結部分を組み直し始めた。

教師　「A児くん、何してるの？」
A児　「ここをくっつけて、こぼれないようにしたいんだけど・・・」

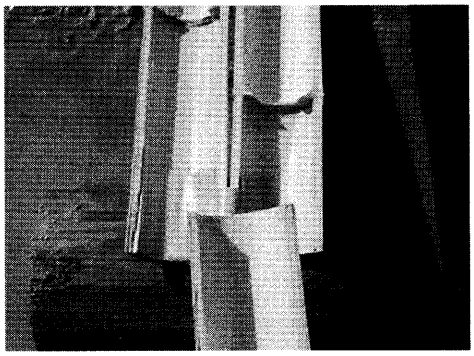
どうやら２つの樋をガムテープでくっつけて固定し、両方の樋に水が流れるようにしたいらしい。樋がうまく並んだところでガムテープをくっつけたが、はがれてしまった。また新しいガムテープをちぎって貼るが、やっぱりはがれてしまう。３回ほど繰り返しやってみたが、くっつかなかった。しばらく考え込んだ後、

A児　「そうだ！」

と言い、保育室内からセロハンテープをもってきた。

A児　「セロテープは水に強いから・・・」

と言いながら、そのセロハンテープでガムテープを止めようと試みたが、すぐにはがれてしまった。



教師　「どう？くっついた？」

と聞くと、首を横に振り、樋をじっと見つめた。

A児　「乾かすことにしよう」

そう言うと、テラスに行き、ガムテープを３枚切り取り、H型の状態のものをつくりはじめた。そこへ、水路を掘り進めていたｚ児が、

z児　「A児くーん、水流してもいい？」

と聞いてきた。A児が困惑した表情を見せると、

z児　「だめなのかなあ・・」

と言って教師の顔を見上げたので、

教師　「A児くん、今乾くの待ってるんだよね」

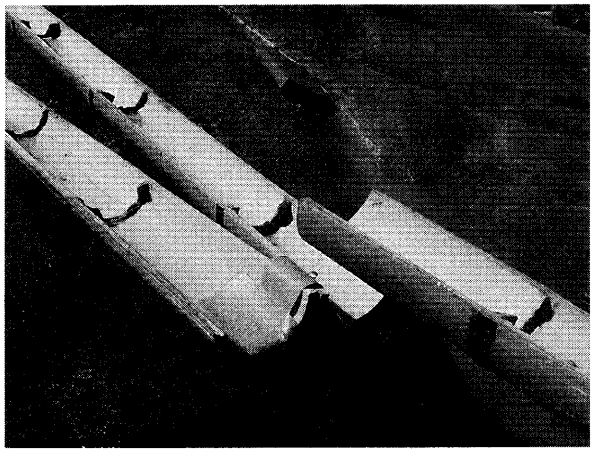
と、A児に確認するように答えた。A児はコクッと頷いた。z児は「仕方ないな」といった表情で水路づくりを続けた。
しばらくすると、

z児　「A児くーん、もう乾いたよー」

と言うz児の声がした。A児は、樋のところまで走って生き、H型のガムテープを貼り付けた。ようやく、ガムテープがはがれずにくっついた。

A児　「よしっ！」
教師　「A児くん、くっついた？」

A児は満足げな顔でコクッと頷いた。



＜「学び」の様相と教師の援助＞

学びの様相

直接体験

・水でぬれた樋にガムテープを貼るとはがれてしまった

・セロハンテープはぬれている樋には全然くっつかなかった

・H 型のガムテープを用意した

・樋が乾くと、ガムテープを貼ることができた

感じたこと

・ガムテープは強いけど、水でぬれているとくっつかないんだ
・セロテープは水に弱すぎるぞ
・くっつけるもの（ガムテープ・セロテープ）ではなくて、竹に問題があるんだ
・補強をするとしっかりとまるんだ
・（予想どおり）乾けば、ガムテープを貼ることができるんだ

学んだこと

・ガムテープの性質（知）
・水の性質（知）
・セロテープの性質（知）
・失敗感（心）

・竹の性質（知）
・達成感（心）
・成就感（心）

・多面的な見方（知）

教師の援助・友達のかかわり

・長さの違う３種類の樋を準備しておく
・ガムテープやセロテープなどを必要に応じて自由に使えるようにしておく
・A 児に、今やっていることを意識化させるような問いかけをする

環境設定　問題意識をもたせる

・時間の保障をする
・A 児の思いに沿うような言葉かけをする
・A 児に、今時分がやっていることを再認識させる
・うまくいったか、いかなかったかを確認する
・できたことを認める

見守り　制止　代弁　評価　確認

＜今後に向けて＞

・最後に教師が「くっついた？」という声かけをしたために、A児は頷くだけの返事になってしまった。本人から「くっついたよ」といたような言葉を引き出すためには「どうだった？」という声かけの方が適切であったと思われる。幼児の姿からは見えないものや読み取れないものについては、日頃から意識して尋ねたり、聞き出したりしていくことが必要なのではないだろうか。

事例５　「明日もする人、この指とーまれ！」　　12月１日（木）　４歳

M児とB児、N児らが保育室の真ん中でお腹を床につけてくるくる回転する遊びを楽しんでいた。教師も一緒にその仲間に加わっていた。そのうち、M児が床をタオルで拭き掃除していたかと思うと、今度は布団に足を乗せて滑らせ始めた。布団だとスケートで氷の上を滑るようなイメージになると考えた様子だったが、教師は布団に足を乗せているのが気になっていたので、声をかけた。

教師　「M児ちゃん、スケート？ あ！ そうだ！ スケート靴つくろうか。段ボールで」
M児　「うん」
N児　「うん！スケートしたい」
B児　「いいね。やりたい」

そこで、教師は段ボール板をもってきて長方形に切り、それにタフロープをつけて下駄のような物をつくった。そして、それを履き、床の上を滑ってみせた。N児がすぐに興味を示した。

N児　「わたしもつくりたい！」

早速N児がつくり始めると、B児やM児、そこに居合わせたO児も一緒につくり始めた。

N児　「ねぇ、タフロープはどんなのにするの？」
教師　「これ（見本）見て、つくってごらん。足が丁度入るのがいいよ」

N児やB児も段ボールを自分の足に合う大きさに切ったり、タフロープの長さを足の大きさに合わせてセロテープで留めたりしている。その間に教師がスケート演技用の音楽を用意した。音楽をかけ、教師とO児とN児らがリンクの中で音楽に合わせて滑る真似をした。

教師　「ほら、３回転だよ」
N児　「わたしもできるよ」

とN児も嬉しそうに回ってみせた。

O児　「ぼくも」

教師がフィギュアスケートのイメージで回転する姿を見ながら、N児、O児らも一緒に回転

技に挑戦などしている。そこへ、ロングスカートやチュールをつけ、スケート靴を履いたP児、Q児らが混じってきた。フィギュアスケートの衣装のイメージのようだったので、声をかけた。

教師　「スケート選手の衣装みたい。素敵ね」

Q児やP児は、音楽のリズムに合わせたり、教師の片足を上げるポーズを真似したりしながら、嬉しそうに踊っている。リンクの中は賑わいを見せ、そして、かたづけの時間になった。

N児　「明日もしよう。明日もする人、この指とーまれ、れ、れ、はーやくしないと指きるぞ。
ろうそく一本とーけた！」

N児が勢いのいい声で言うと、周囲にいたO児、M児、B児、R児、Q児、S児、P児らが指にとまって、明日もすることになった。

＜「学び」の様相と教師の援助＞

学びの様相

直接体験

・布団で床の上を滑った

・布団の代わりに段ボールの板を使った

・段ボール板でスケート靴をつくった
・自分の足に合うように板を段ボールカッターで切ったり、タフロープを切ったりした
・音楽に合わせて滑った
・回転した
・友達も一緒に滑った

感じたこと

・タオルや布団は床の上をよく滑るなぁ（M児）
・段ボール板でも床の上を滑れるんだ

・段ボールで靴がつくれるんだ
・自分の足に合わせた方が丁度良くなって滑りやすい

・音楽があると楽しいな
・くるくる回転するのは面白い
・友達が衣装をつけて滑るのも面白い

学んだこと

・ 床の上を滑る面白さ（身体）

・靴のベルトの加減、調節（身体）

・音楽に合わせて滑る楽しさ（心）
・回転する楽しさ（身体）
・みんなで一緒に滑る楽しさ（社）

教師の援助・友達のかかわり

・アイディアを提供する
・見本をつくる
・つくり方を示す
・幼児らのアイディアや場を支える（言葉かけ、音楽）
・一緒に滑る

環境設定、モデル、参加、提案

・幼児らの行動、言動など様子を見とる
・タイミングを見計らって声をかける
・段ボールやカッターの扱い方の手本をする
・靴をつくるコツを伝える
・動きのモデルをする
・面白い現象や行動に対して関心を寄せ、共に興味をもつ
・雰囲気を盛り立てる声かけをする

教示、モデル、意識づけ、共感、評価、意欲づけ

＜今後に向けて＞

・N児は、自分から遊びを創り出したり、一つの遊びの場に執着してかかわったりといった経験が少ないと捉えているので、上記の様な場において、アイテムやイメージをもつと楽しいという体験を今後もさらに増やしていく。

事例６　「うーん、ぐるぐるスケート＆ポケモンランド」　　12月２日（金）

今日も前日に引き続き、ぐるぐるスケートランドが始まった。B児、N児、M児らが一緒にマルチパネの端を持ち、組み合わせながらスケートランドの家をつくっている。それをA児やT児らが手伝っている。製作テーブルでは、Q児、U児らが段ボールをカッターで切り、昨日の見本を見ながらスケート靴をつくっている。

リンクでは、O児、U児、W児、K児らが嬉しそうに滑っていた。そこへ、I児が入ってきて、滑って転ぶ真似をした。L児、X児、Y児も仲間に加わり、「おもしろい」と滑り具合を試している。音楽が流れ始めるとA児とM児が二人で手をつないでアイスダンスのように滑ったり、M児とB児が踊りながら滑ったりしていた。そこへO児がやってきて教師に言った。

O児　「ねぇ、ここ、ポケモンランドでいい？」
教師　「え？ 先生はわかんないなぁ。N児ちゃん、M児ちゃん、B児ちゃん達に訊いてみたら？」

O児は、U児、Z児、X児、U児らとポケモンのイメージで遊んでいたので、スケートランドの場を自分達がポケモンになって使えないか考えたようだった。O児はすぐにN児の所へ行き、顔をのぞき込むようにして訊いた。

O児　「ねぇ、ここポケモンランドにしていい？ね、いいやろ？」
N児　「うーん・・・・・」

O児は一生懸命N児に頼んだ。N児が渋っていると、O児はN児と仲のよいU児の名を出した。

O児　「だって、U児ちゃんもポケモンの仲間ねんよ。いいがいね」
N児　「M児ちゃんにも訊いて」

そこへ二人のやりとりを聞いていたU児とM児がやってきて、U児がN児に言った。

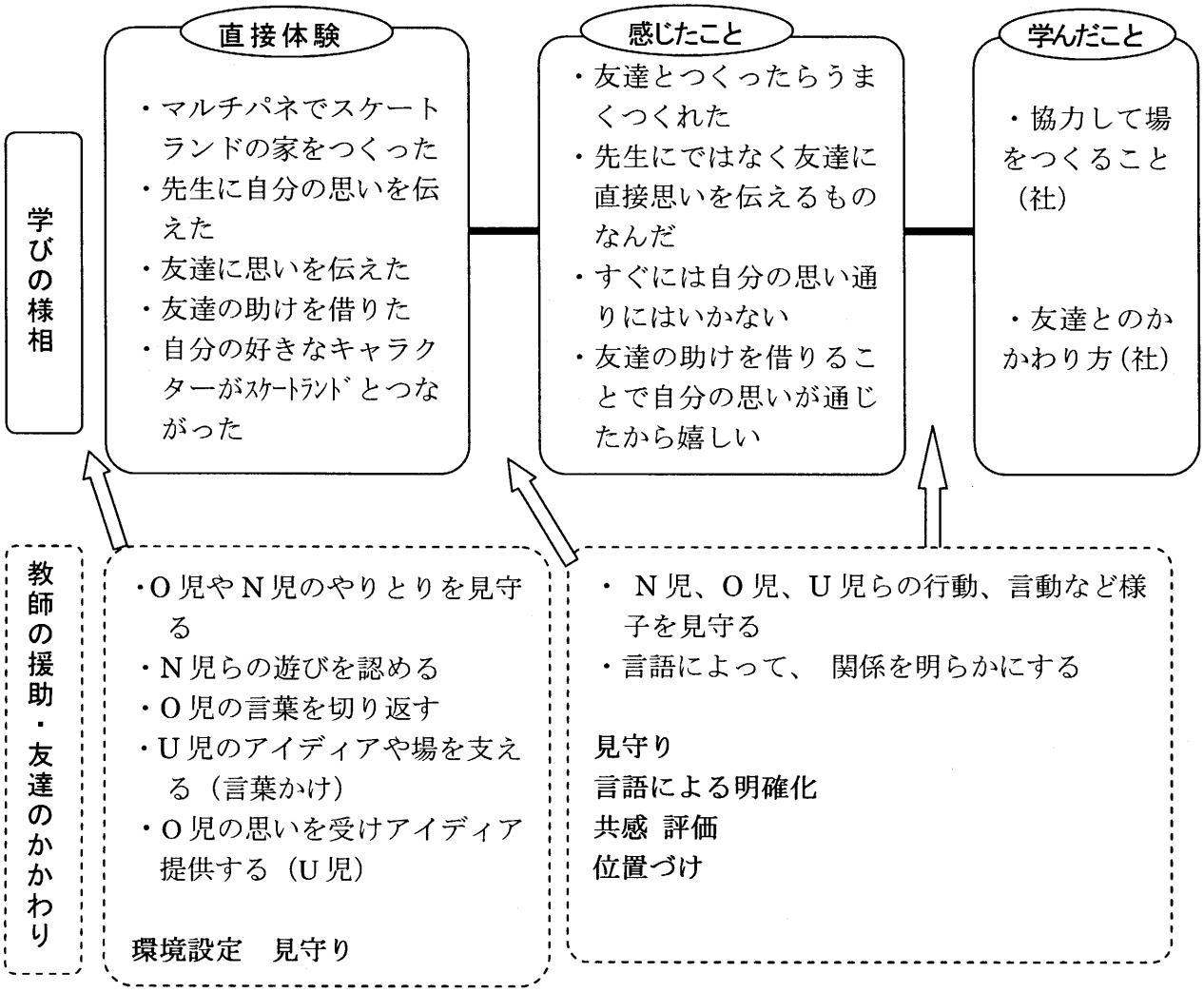
U児　「ねぇ、一緒にやろう。ぐるぐるスケートとポケモンがつながるってのはどう？」
N児　「いいけど」
M児　「うん。いいよ」
O児　「やった！そうしよう、そうしよう！」

O児は自分達ポケモンが受け容れられたので大喜びした。

教師　「よかったねぇ。それで、なんていう名前になるの？」
N児　「うーん、ぐるぐるスケート＆ポケモンランド」

こうして、ポケモンも参入することになった。早速、O児、U児、Z児らが意気揚々とリンクに入ってきて、カメが甲羅で回転するように高速スピンらしき動きをし始めた。

＜「学び」の様相と教師の援助＞



＜今後に向けて＞

・N児やO児、U児らが言葉を交わしながら、アイディアを出したり、思いを伝えたりして遊びの場を紡いでいけるように、今後も見守ったり、時には橋渡しをしたりしていきたい。
・O児が友達の遊びに入ろうとする時に無理矢理でなく言葉で思いを伝えていることを認めながら、更に自分の思いを相手に分かるように伝えられるよう見守りたい。

事例７－①　「だって、約束やぶったもん」　12月５日（月）

したい遊びの時間、U児が困ったような表情で教師の所にやってきた。

U児　「先生、O児くんがたたいた」
教師　「え、O児くんがたたいたの？　なんでかな？」
U児　「・・・・・」
教師　「じゃ、O児くんに訊いてこよう」

教師はU児と一緒にO児の所へ行った。なぜO児が自分を叩いたのか訳を訊くよう促した。U児がなかなか切り出せずもじもじしていたので、教師が橋渡しをした。

教師　「O児君、U児ちゃんがお話、あるんだって」
U児　「なんでたたいたん？」

U児は小さな声でやっと訊いた。

O児　「だって、U児ちゃん、約束やぶったもん」
教師　「約束？　どんな？」
O児　「ポケモンごっこ、一緒にやるって言ったのに、やらんもん」
教師　「え、それで叩いたの？」

教師は、U児がO児が強引に誘うので、金曜日は１日だけ誘いにのってあげたのだと思った。そこで、U児の表情を伺いながら言った。

教師　「ねぇ、U児ちゃんはポケモンごっこ、やりたくなかったの？」

U児は無言だったが、こくんと頷いた。

教師　「Oちゃん、U児ちゃんは今日はやりたくなかったみたいよ」

O児は、残念そうな表情になった。U児は、M児、N児らと外へ遊びに出て行った。

＜「学び」の様相と教師の援助＞

O児の学びの様相

直接体験

・約束を破られたので相手を叩いた

・叩いた理由を相手に伝えが、相手は戻らなかった

感じたこと

・約束を破られたから嫌だ

・相手が自分との遊びにもどってくれないのは、何故なんだろう。悲しいなあ

学んだこと

・怒り（心）

・疑問（心）
・焦燥感（心）
・虚しさ（心）

教師の援助・友達のかかわり

・O児とU児を引き合わせる
・叩いた訳を訊かれた（U児）

仲立ち
問いかけ

・O児の考え、思いを聞く
・O児にU児の思いを伝える

受け止め
代弁

U児の学びの様相

直接体験

・O児に叩かれた
・O児に叩いた訳を訊いた
・ポケモンでなく女友達と一緒に遊んだ

感じたこと

・何故O児は叩いたのだろう。嫌だなぁ
・理由を訊くのは嫌だけれど、聞いてみてよかった。
・先生が分かってくれた
・自分の思った遊びができてよかった

学んだこと

・怒り（心）
・悲しみ（心）
・安堵感（心）

教師の援助・友達のかかわり

・U児がO児に訳を訊けるように仲立ちしたり促したりする
・U児の気持ちに共感する

仲立ち　促し
共感

・U児の心情を推察する
・U児の考えを代弁する
・U児の気持ちに寄り添う

推察　代弁　共感

事例７－②　「ばぶばぶー」　　12月６日（火）

ここ数日、マルチパネで家をつくる機会が増えている。今日はM児、N児、U児、B児らが保育室の一角で自分達の家をつくり始めた。協力しあいながらマルチパネを運んだり、組み立てたりするのも上手になってきた。

教師　「ここは何のおうちですか？」
U児　「保育園です」
教師　「そうなの。じゃあ、U児ちゃん達は保育園の先生なのかな？」
U児　「うん。そうだよ」

一方、その３m程離れた場所で、U児、O児、Z児、X児らが「怪獣ごっこだ」と言ってマルチパネで基地をつくっていた。こちらもなかなかうまく組み立てている。２カ所の家でそれぞれが、「保育園」、「怪獣」のイメージを共有しながらしばらく遊んでいた。すると、O児、U児らが基地を押して、そのままの形で「保育園」の真横に移動してきた。教師は幼児ら同士の遊びの場と場がつながっていけばよいと思い、声をかけた。前日のU児とO児のいざこざがあったので、かかわりの中で二人が楽しい思いができればよいと思った。

教師　「あら？どうしたの？」
O児　「合体するげん」
教師　「あら、いいわねぇ」
O児　「ねぇ、一緒にやろう。いいやろ？」
N児　「えー、私ら保育園の先生やよ」
O児　「僕も中に入っていい？」

今回は自分のイメージを通そうとするのでなく、O児は女の子らのイメージに合わせた。そして２つの場が一緒になった。O児はお腹が痛い役になって、「保育園」の保健室（マルチパネ）の中で寝ている。U児がお母さんのようにO児に布団をかけ、膝の上に頭を乗せてあげたりしながら、世話をしていた。そのうち、おうちごっこに変わったのか、O児が赤ちゃんの役になった。

U児　「O児くん、お熱だいじょうぶ」
O児　「ばぶばぶー」

と言いながら、おでこを撫でてもらい、O児は嬉しそうである。その後、O児はU児に抱っこされて廊下へ出た。

教師　「あら、お母さん、お散歩ですか？」
U児　「はい。ちょっと公園まで行ってきます」

U児が自分と同じような背丈のO児を抱っこして歩く姿が、実に微笑ましい。そして、N児、U児、O児の３人で川の字に寝たり、O児にご飯を食べさせたりとU児もN児も笑顔でいいお母さんぶりを発揮し、微笑ましい遊びの場となった。あとのU児、X児、Z児らは、O児に「怪獣ごっこ、そんなん、もう知らん」と言われたが、O児らの家のイメージを大切にしながら、怪獣ごっこの基地を動物園のイメージに変えて遊んでいた。

その日の弁当の時間、一緒に弁当を食べながら、O児におうちごっこの話を聞くと、「僕、赤ちゃんやってん。B児ちゃんも赤ちゃんやってんけど、お姉ちゃんになった。U児ちゃんはお母さん。M児ちゃん、N児ちゃんはお姉ちゃんねん」と嬉しそうに教えてくれた。

＜「学び」の様相と教師の援助＞

O児の学びの様相

直接体験

・ ﾏﾙﾁﾊﾟﾈを組み立てて自分達の基地をつくった
・場を合体した

・ 赤ちゃん役になった
・ ずっと赤ちゃん役になり、U児達と遊び続けた
・ 先生に話を聞いてもらった

感じたこと

・友達と一緒につくった場を何かに見立てて遊ぶのは楽しいな
・保育園と動物園になった
・ 合体したら、一緒に遊ぶきっかけができたぞ
・ 赤ちゃんになるといろいろ世話をしてもらえるんだ
・ポケモンごっこではU児と遊べなかったけど、これなら一緒に遊ぶことができるぞ

・ 赤ちゃん役でU児達と遊ぶのは楽しかったなぁ

学んだこと

・友達と一緒に遊ぶ一体感（社）

・イメージに合わせた遊びの場の変化（知）

・相手に合わせた柔軟性（社）
・満足感（心）
・喜び（心）

教師の援助・友達のかかわり

・ O児らのアイディアを認める
・ O児、U児らの遊びを見守る
・ 遊びの様子を聞く

認め　見守り

・ O児、U児らの行動、言動など様子を見守る
・ かかわりが続くように声をかける

見守り　声かけ

U児の学びの様相

直接体験

・ マルチパネで保育園をつくった
・ O児の思いを受け容れてあげた
・ お母さん役になって、赤ちゃん（O児）の世話をした

感じたこと

・ 友達同士で場をつくって遊ぶのは楽しいな
・ 自分達の遊びの仲間になるのなら入れてあげよう
・ 赤ちゃんを世話するのは面白いなぁ

学んだこと

・寛容（心）
・ ごっこ遊びの楽しさ（心）

教師の援助・友達のかかわり

・役割を明らかにする
・ U児らのアイディアや場を支える
・ 赤ちゃん役になり参加する（O児）

声かけ　見守り

・N児、O児、U児らの行動、言動など様子を見守る
・かかわりが楽しいものになるよう声かけする

見守り　共感　位置づけ　声かけ

＜今後に向けて＞

・普段は自分の思いを押し通そうとするO児が、相手のイメージに合わせて役選びをし、沿っていった姿を認め、一緒に喜びながら、少し寛容になった心を他の場面にも活かしていけるように援助していく。

・U児が自分の思いを自分の言葉で表出し、友達と伝え合う場を大事にしながら自由に遊びを楽しめるように援助していく。

事例８　「おまたせー！」　　１月16日（月）

ｊ児、ｋ児、ｃ児、ｄ児、ｍ児らが保育室内のままごとコーナーで、ままごとを楽しんでいた。ｊ児、ｋ児がテーブルの前に並んで座り、楽しそうにおしゃべりしている。そこへｍ児が何度も食べ物や食器を運んでいた。

教師　「ここはレストラン？」
ｋ児　「ちがうよ、ホテルだよ」
ｊ児　「ここが食べる部屋で、向こうが本を読む部屋なの」

となりのテーブルでは、ｃ児とｄ児が本を読んでいた。

教師　「ｍ児くんはウエイターさん？」
ｋ児　「ちがうよ、バードだよ」
教師　「はあ？」
ｊ児　「鳥なの。鳥だから、バード！」
教師　「・・・へえ・・・バードが食べ物を運んでくれるの？」
ｋ児・ｊ児　「うん」

ｍ児はうれしそうに、次々とままごとコーナー内にある食べ物を運んでいた。そのうち、ｋ児、ｊ児、ｃ児らがスカートやチュールを身に着け始めた。その様子をｍ児はうらやましそうに眺めていた。そこで教師は赤い鳥の面をもってきて、ｍ児にかぶせた。

教師　「はい、バードさんもおめかししようね」
ｋ児　「わあ、すてきー」

ｋ児の言葉を聞き、ｍ児はより張り切って食べ物を運び始めた。すみれ組のままごとコーナーの食べ物をすべて運びきると廊下へ飛び出して行き、さくら組にある食べ物ももってきた。

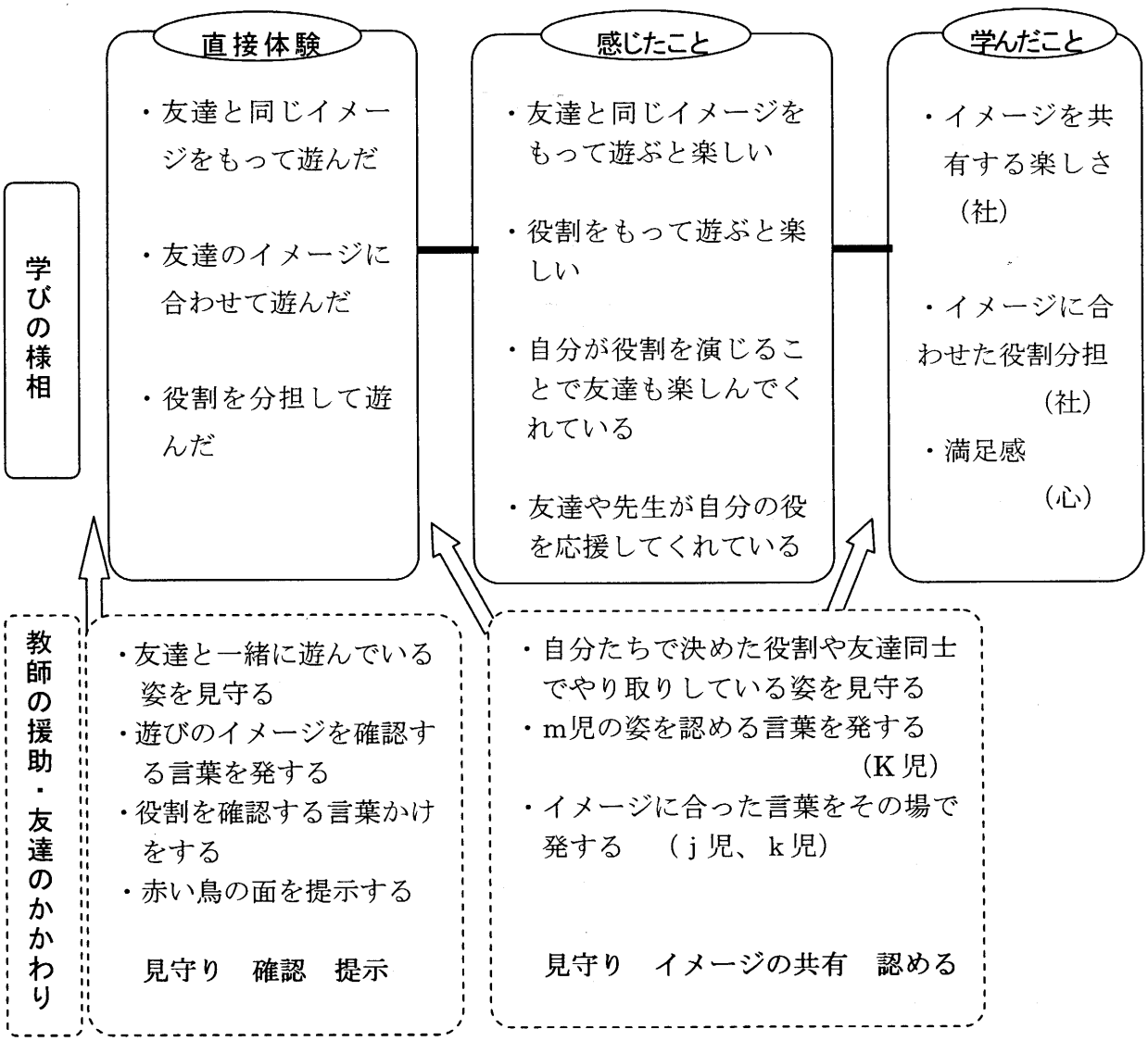
ｍ児　「おまたせー！」
ｊ児　「ありがとうバード。はい、これ」

ｊ児がｍ児におにぎりを一つ渡した。

教師　「お礼のおにぎり？」
ｊ児　「ううん、エサ・・」
教師　「・・・・・・・ごほうび・・かな」

m児の方を見ると、とてもうれしそうな顔でおにぎりを食べていた。そして再び食べ物を探しに廊下へ飛び出していった。

＜「学び」の様相と教師の援助＞



＜今後に向けて＞

・遊びの中で、幼児らは様々な立場（遊びを進める、従う、合わせる等）で友達とかかわっている。イメージをもって遊んでいる姿を見守りつつ、必要に応じてイメージに合った言葉をかけたり、アイテムを提供したりしていきたい。

事例９　またするからとっておいて　　１月18日（水）

すみれ組Ｔ児が登園してすぐに連絡帳を持ってきた。『12月に家で転倒し背中を打ったところが実は不全骨折だったので、なるべく安静に過ごさせてほしい』とのことだった。しかし、Ｔ児はいつも通り運動着に着替えて、プレイルームにＵ児とともにやってきた。

Ｔ児　「ねえ先生、トランポリンしたい」
養護教諭　「うーん、トランポリンではずむと背中によくないと思うんだ」
Ｔ児　「うーん、でもー」
養護教諭　「部屋の中で遊ぶ方がいいんじゃない？」
Ｔ児　「でも、遊ぶことないもん」
Ｕ児　「製作コーナーで望遠鏡作るのは？」
Ｔ児　「製作なんて一回もしたことない」
養護教諭　「そうなの」
Ｕ児　「おままごとは？」
Ｔ児　「そんなのしない。未満児の時だけ。もっとお姉さんぽいのがいいの」

Ｔ児もＵ児も、うかない表情でプレイルームで遊んでいる子を見回している

養護教諭　「そうか。じゃあ、つきほしさんのやってること見てこない？ お姉さん達のやってるの」
Ｔ児　「うん」

養護教諭の後ろにくっついてＴ児とＵ児、近くにいたｆ児も年長組保育室へ行った。ちょうど女児３人がカップにマジックで色を塗っていた。Ｔ児はじっと様子を見ていたが、年長組が相手だからか黙っていた。そこで保健室にも材料があると思うから何か作ろうと誘うと頷いてついてきた。保健室に行くとｆ児やｇ児、年長組のｘ児も集まって来た。棚から製作の材料を出して見せると４人とも注目していた。

ｘ児　「私、これで何か作りたい」
Ｔ児　「私も」
ｘ児　「うん、私も」
ｆ児　「私もほしい」（材料の取り合いになりそうになった）
養護教諭　「じゃあ、これだけ使っていいよ。４人で相談して分けてね」

T児らは、保健室のテーブルで材料を相談しながら4人で分けて、それぞれに作り始めた。保健室にけがをした幼児が来たのを機会に養護教諭は一旦その場を離れ、また戻ってみた。

T児　「ねえ、私、かにさん作ってるよ。ここどうしようかな。そうだ、マジックで塗ろう。マジックある？」（T児は自分から養護教諭に話しかけてきた）

養護教諭　「あー。T児ちゃん、考えたねえ」

はさみやボンドを共有して、20分程4人で作業を続けた。かたづけの時間になりT児はその場をかたづけ終えた。

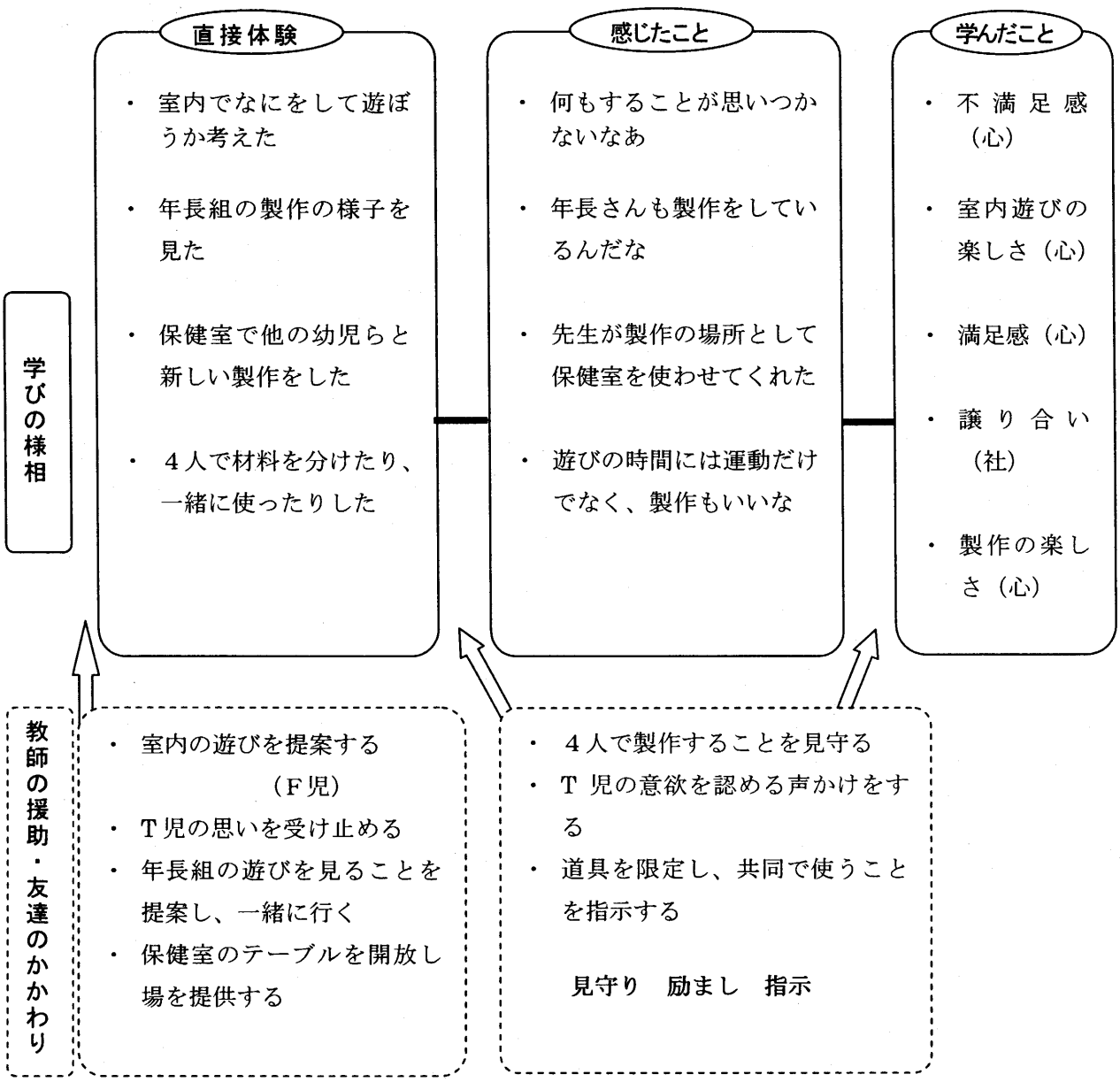
T児　「またするからとっておいて」

養護教諭　「うん、わかったよ。またおいでね」

T児は手を振って保育室へ戻っていった。

翌日以降、おままごとコーナーで遊んだり、保健室で将棋をしたり室内で遊ぶT児の姿が見られた。

＜「学び」の様相と教師の援助＞



＜今後に向けて＞

・Ｔ児は、これまで広い空間での運動遊びが好きで、室内で友達と密接にかかわることが少なかった。しかし、けがをした時や、天候が悪い時には室内でも楽しい遊びがあることを知らせたい。そのために一緒に遊んだり、室内の教材や遊具に目が向くような環境を構成したりしていきたい。

事例10 「うん！」　　2月24日（金）

E児、f児、t児らが、忍者服を身につけ、テラスでマルチパネで忍者基地をつくっていた。ロープを吊るしてほしいという要望があったので、吊るしたところ、ロープにぶら下がって、平均台からマルチパネの基地に飛び移る修行が始まった。E児とf児が交代で飛び移ることに挑戦しているが、なかなかうまくいかない。2人ともマルチパネの基地に足を乗せるところまでは行くが、そのまま戻ってきてしまっていた。5回目くらいの挑戦のとき、マルチパネの上で踏ん張りながらE児が言った。

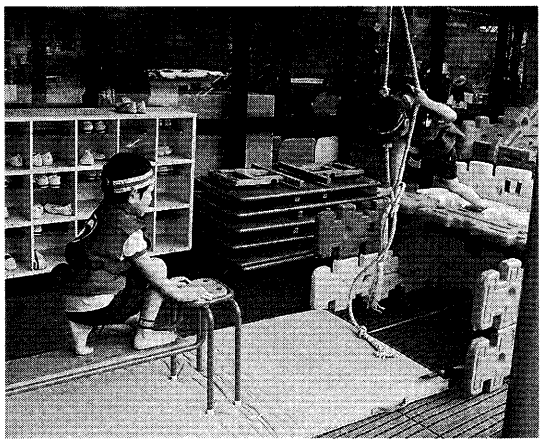
E児　「ここが滑るんだよなあ・・・・ああ・・・」

そう言いながら戻ってきた。

教師　「基地には届いてるんだけどね。」
E児　「うーん・・・・」
教師　「ろくぼくのときはうまく行ってたよね。」
E児　「うん・・・、あっ、そうだ」

E児は何か思いついたように挑戦しに行った。どうするのか見ていると、マルチパネのつなぎ目につま先をひっかけようとしていた。なかなかうまくいかなかったが3回目にようやくひっかけることができ、そのままマルチパネに飛び移ることができた。

教師　「やった、E児くん、大成功」



E児は満足げにニコニコしていた。その様子を見ていたf児が真似してやってみた。ひっかけるところまではうまくいくが、そのあと飛び移ることができない。7回目くらいの挑戦でなんとか、体全体を使って踏ん張りながら、飛び移ることができた。

教師　「やった、f児くんも成功だ」

そのあと、E児とf児は飛び移る挑戦を繰り返していた。そこへそれまで様子を見ていたt児も挑戦し始めた。普段からあまり体を動かすことのないt児だったので、どれくらいできるものかと見ていたら、驚いたことに、一回で飛び移ることができた。

E児　「すげー、t児くん成功」
教師　「すごいね、t児くん」

当の本人が一番驚いた表情でマルチパネの上に立っていた。少し恥ずかしそうに、でもうれしそうに、また挑戦しに来た。

教師　「t児くん、もう一回やってみて」

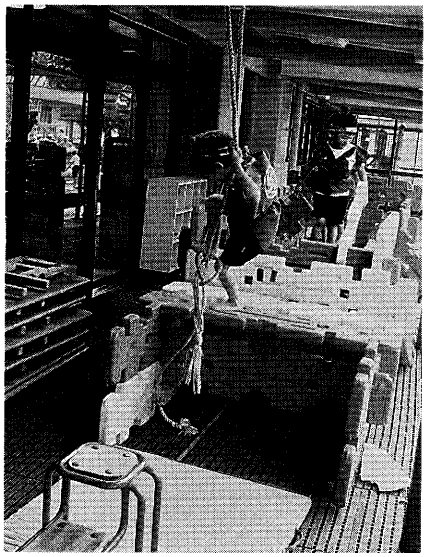
t児が再び挑戦した。踏ん張ることなく、軽々と飛び移った。

E児　「そうか、両方の足を基地に乗せればいいんだ」
教師　「よし、E児くんとf児くんもやってみよう」

t児が両足で着地していることにE児が気づいたので、その意見を取り上げ、誘いかけた。(実はもう一点、t児は背筋をうまく使って体を起こしながら、体重移動が上手にできていたのだが、理解するのが難しいと思われたので、この場では取り上げなかった)

早速E児が両足着地に挑戦した。前よりもうまく飛び移ることができた。

続いてf児も挑戦した。しかし、ロープに掛けてある片足がうまくはずれず、片足着地になってしまった。3回ほど挑戦したが同様の原因でうまくいかなかったので、声をかけた。



教師　「f児くん、足が引っかかってしまうから、最初から足をかけないで手の力だけで行ってみたら。f児くんなら腕の力だけでいけると思うよ」
f児　「うん」

返事をすると、足をかけずに挑戦した。体重移動がうまくいっていないために踏ん張りが必要となったが、前よりもスムーズに飛び移ることができた。

教師　「やったあー」(拍手)
f児　「うん！」

f児はうれしそうな表情でうなずいた。その後も、何度も挑戦していた。

＜「学び」の様相と教師の援助＞

学びの様相

直接体験

・ロープにぶら下がり、平均台からマルチパネの基地に飛び移ることに挑戦した

・マルチパネのつなぎ目に足を引っ掛けて、飛び移った

・両足で着地して、飛び移った

感じたこと

・マルチパネの表面はつるつるしているなあ（E児）

・マルチパネのつなぎ目に足を引っ掛けると飛び移ることができたよ

・教師や友達に認められてうれしい（t児）
・友達のいいところを取り入れたらうまくできたよ
・両足で着地すると、うまく飛び移ることができたよ
・腕の力だけで行くことができたよ。両足着地もうまくいったよ（f児）

学んだこと

・マルチパネの材質（知）

・失敗感（心）
・成功感（心）
・満足感（心）

・足の引っ掛け方（体）

・ロープにぶら下がる感覚（体）
・体の重心のかけ方（体）

教師の援助・友達のかかわり

・ロープを吊るす
・できていることと、できていないことを確認するような言葉かけをする
・上手な友達のやり方を見る場をつくる
・真似してやってみるよう声をかける
・具体的なアドバイスを送る
・何度も挑戦している姿を見守る

環境設定　確認　誘い　助言　見守り

・うまく飛び移ることができたことを一緒に喜ぶ

共感　評価

＜今後に向けて＞

・友達のすることを真似したり、取り入れたりする中で、そのよさやうまくいく方法を確認しながら、遊びを進めていく経験もさせていきたい。

4歳児　学年のまとめ

1．「学んだこと」について

～「学び」につながる4つの側面 ～

身体的側面

- ロープにぶら下がる感覚（事例2、10）
- 足を引っ掛けるタイミング　（事例2）
- 足の引っ掛け方（事例10）
- 体の重心のかけ方（事例10）
- バランスのとり方（事例2）
- 飛び移るときの体の使い方　（事例2）
- 床の上を滑る面白さ（事例5）
- 痛み（事例2）
- 靴のベルトの加減、調節　（事例5）
- 回転する楽しさ（事例5）

知的側面

- ガムテープの性質（事例4）
- 水の性質（事例1、4）
- セロテープの性質（事例4）
- 竹の性質（事例4）
- 土の性質（事例1）
- マルチパネの材質（事例10）
- イメージを合わせた遊びの場の変化（事例7－②）
- 多面的な見方（事例4）

心的側面

- 失敗感（事例2、4、10）
- 成功感（事例2、10）
- 満足感（事例3、8、9、10）
- 達成感（事例4）
- 成就感（事例1，4）
- 怒り（事例7－①）
- 疑問（事例7－①）
- 焦燥感（事例7－①）
- 虚しさ（事例7－①）
- 怒り（事例7－①）
- 悲しみ（事例7－①）
- 安堵感（事例7－①）
- 喜び（事例7－②）
- 不満足感（事例9）
- 音楽に合わせて滑る楽しさ（事例5）
- 室内遊びの楽しさ（事例9）
- 製作の楽しさ（事例9）
- 期待感（事例3）
- 寛容（事例7－②）

社会的側面

- イメージを共有する楽しさ（事例3、8）
- イメージにあわせた役割分担（事例8）
- 協力して場をつくること（事例6）
- 友達と一緒に遊ぶ一体感（事例2、3、7－②）
- 友達とのかかわり方（事例6）
- 譲り合って道具を使うこと（事例9）
- 遊びからかたづけへの切り替え（事例3）
- みんなで一緒に滑る楽しさ（事例5）
- ごっこ遊びの楽しさ（事例7－②）
- 相手に合わせた柔軟性（事例7－②）

・身体的側面を見ると、ぶら下がる、滑る、回転するなどの動きを繰り返すことを通して、その動きを身につけると同時に、バランスやタイミング、加減といった身体感覚も磨いている。

・知的側面を見ると、実際に触れたり試したりしながら、ものの性質や材質を理解していることが伺える。

・心的側面を見ると、幼児らは満足感、怒り、失敗感、楽しさなど、喜怒哀楽に関する様々な感情を、友達関係の中で感じ取っていることがわかる。

・社会的側面を見ると、イメージを共有する楽しさや友達と協力して場をつくること、友達と一緒に遊ぶ一体感など、友達の存在が生活の中で欠かせないものとなっている。

２．教師の援助について

直接体験をすることにつながる援助

見守り６　尊重

受け止め
提案２　参加２　手本　モデル
提示　　誘い　助言　提供
イメージの共有
問題意識をもたせる
問題提起　　揺さぶり
切り返し　　問いかけ　　促し
声かけ　　確認２　　仲立ち２
認め　　共感

感じたり学んだりすることにつながる援助

見守り６

教示、　モデル　　励まし２
聞く　　推察　　代弁３
イメージの共有　参加　提示
確認２
方向付け　　位置づけ２
意欲づけ２　　意識づけ２
言語による明確化、
イメージの言語化、
問いかけ　　揺さぶり
声かけ２　　制止

共感９　評価５　認め

環境構成５

※　数字は、事例で取り上げられた援助の回数である。

・直接体験をすることにつながる援助では、まず教師が一緒に遊んだり、モデルになったりすることが大切である。そして一緒に遊びながら、アイディアを提供したり、提案をしたりすることが、直接体験を支えている。また、問いかけたり、確認したり、問題意識をもたせたりすることが、直接やってみたいという意欲につながっていると思われる。
・感じたり学んだりすることにつながる援助では、言語に置き換えたり、関係付けたり、はっきりさせたりするような「○○化」や「○○づけ」といった援助が多くなっている。
・「直接体験をすることにつながる援助」と「感じたり学んだりすることにつながる援助」のどちらにも多くの援助が見られる。中でも、「見守り」「提示」「揺さぶり」「問いかけ」といった援助は、どちらにも見られる。